

審議結果

審議会等名称：神奈川県総合計画審議会第103回計画推進評価部会

開催日時：令和7年5月23日（金）15:00～17:00

開催場所：神奈川県庁西庁舎6階 災害対策本部室

※Web会議サービスによるオンライン会議を併用して実施

出席者：◎小野島真、○小池智子、河野英子、伊達仁人、坪谷美欧子、中西正彦、原嶋洋平、
矢島洋子、米田佐知子、中田直樹〔計10名〕

（◎部会長 ○副部会長）

次回開催予定日：未定

問合せ先：政策局政策部総合政策課計画グループ 陶山

電話番号045-210-3064（直通） ファックス番号045-210-8819

審議経過（議事録）

議題 「新かながわランドデザイン 実施報告書2024」について

《資料について事務局から説明》

《4月24日、25日に実施した計画推進評価部会グループ会議の審議結果について、各グループの座長（グループA：小池副部会長、グループB：河野委員、グループC：小野島部会長）から報告》

- 小野島部会長：それでは、評価報告書全体を通じて、特に総合計画審議会による二次評価について、評価区分が妥当かどうか、付記すべき指摘事項がないか、追加・修正等がないかということを中心に、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。とっております。
- 原嶋委員：ご報告ありがとうございました。13のプロジェクトを通して伺いまして、大変よくわかりましたが、13のプロジェクトの中で、1つだけ異質のプロジェクトがあります。それはプロジェクト5「観光・地域活性化」です。県が謙虚にKPIの平均達成率の評価から1つ下げたものを、二次評価で1つ上げています。評価を上げたことに対して、部会全体として理由をしっかりと確認して、コンセンサスを得ておく必要があります。私も専門外ですし、グループの担当ではないのでわかりませんが、今、観光は盛んなので良いかもしれませんが、地域活性化や定住・移住については、特に63ページの関連する統計データ「15～64歳の転入者数・転出者数・転入超過数」を拝見すると、必ずしも良いデータが出ているわけではありません。そういうことも踏まえて、1つ評価を上げたことについて、グループだけではなく、部会の全員で確認して、本当によいのかということを経事録に残しておいていただきたいと思います。以上です。
- 小野島部会長：ただ今のご発言に関しまして、河野委員から少しご説明いただけますか。
- 河野委員：原嶋委員、ご意見ありがとうございます。グループBで議論いたしまして、委員の皆様にも建設的にご意見をいただいたところです。KPIの平均達成率が98.4%と非常に高い数値になっている中で、問題のある数値があるとはいえ、一段下げるほどではないのではないかという意見になりました。資料3「部会グループ会議における意見と県の対応」の7ページに、それぞれの委員の意見が記載されているところでございます。
議論の中では、転入者数のデータをもって、県の自己評価を1つ下げたことについて、1段下げるほどの寄与率の大きさと考えることは適切なのかという、ご発言がありました。委員の皆様と数字を見ていく中で、KPIの達成率からすると、1段下げるほどのものではないのではないかという考え方になりました。それよりも、今後の対応をよりきっちりと指摘していく、これから県が対策として講じるべきことについて

て、より細かく、よりきちんと書くことが重要という考え方です。今回のKPIや指標の数値を基にすれば、ここは評価する、そのうえで、今後の課題と対応の方向性については、もう少し調べていただく必要がある内容もございますので、そういった点も踏まえて、より詳細に分析し、支援の体制を構築していくことが好ましいという結論になったというところでございます。

○ 小野島部会長：二次評価はグループの総意で、対応策をしっかりと書くという話で決着しているという理解でよろしいでしょうか。原嶋委員いかがですか。

○ 原嶋委員：悩ましいところは、他のプロジェクトもそうですが、一次評価を、上げるか下げるかという判断基準について、同じ物差しを我々が持てるかというところですね。先ほど部会長からご説明のあったプロジェクト8の「脱炭素・環境」のところでは、一つ基準を下げた方がいいのではないかと悩みながら、今回はあと一、二年推移を見ようというところで、下げなかったというのがあったりします。

また、プロジェクト5の「観光・地域活性化」では評価を上げたということで、少し見方を変えれば、やや甘いのではないかという印象もないわけではないです。

いずれにせよ、私個人の意見というよりは、そういったことについては、できるだけ物差しを共有して、皆さんで同じような物差しを持って、特に変えたところについては、全体で確認することが今後も必要であると思います。河野委員のご説明については、同意いたします。

○ 小野島部会長：米田議員、お願いします。

○ 米田委員：今のご議論のような大きな視点ではないのですが、99ページ、プロジェクト9「生活困窮」で、少し気になったことについて、指摘させていただきます。

まず、グループ会議全体の調整について、いろいろな分野の数字を事務局の皆様には調整いただき、お礼を申し上げたいと思います。私もいくつか意見を申し上げた中で、丁寧に対応いただいたことに感謝しております。

意見したところで、99ページの「今後の課題と対応の方向性」の一つに子ども食堂についての言及があります。子ども食堂というのは、かなり多様性があるので、生活困窮対応だけしているものばかりではないという中で、子ども食堂等と名称が特出しされているということに若干の違和感があることをグループ会議では指摘させていただきました。それが後半の地域づくりというところに繋がってはいますが、「子ども食堂等の取組を支援するだけでなく、子ども食堂等を利用する子どもたちを」というように重ねてあるので、子ども食堂が、子どもの貧困の対応の一番象徴的な取組だというように読めなくないと感じています。おそらく所管課とも調整してくださった結果だと思いますが、子ども食堂等の「等」に何が入っているのか、改めて気になりはじめたというところですね。プロジェクト9では、後の方に、あすなろサポートステーションについての言及もあります。具体的に、困窮状態にある若者の支援というところでは、あすなろサポートステーションは、本当にストライクゾーンで取組を行っているような立場ですので、ここで子ども食堂等という表現が特出しになるのが良いのでしょうか。この段階で申し上げるということではないのかもしれませんが、この文章には少し違和感があると思いましたので、指摘させていただきました。

○ 小野島部会長：99ページのところ、「子ども食堂等の取組を支援するだけでなく、子ども食堂等を利用する子どもたち」という形で、子ども食堂等が二回出てきているわけですが、特に後段の方の子ども食堂等を利用するというのが、どういう子どもを指しているのかという所を懸念されているというように思います。こちらの方は、グループAの皆さんいかがでしょうか。

○ 小池委員：米田委員、ありがとうございます。こちらの点については、グループ会議でも様々な意見が出され、活発に議論した部分でもあります。子どもたちに対する支援の仕方、困窮した子どもたちの支援

をどのように考えていくかですが、子ども食堂は一つの事例ですが、その他に米田委員がお話しされましたあすなろサポートステーションなど、そういったような取組を「等」の中に含めています。具体的にもう少し表現した方がよろしければ、ここに加えさせていただくということでもよろしいかなと思いました。事務局いかがでしょうか。

○ 古河総合政策課長：グループ会議の議論を踏まえて、「今後の課題と対応の方向性」について記載していますが、グループ会議の議論をもう一度確認して、正しい表現に修正させていただきたいと思います。

○ 小野島部会長：それでは、もう一度、事務局の方で精査していただき、文章を考えていただくという形でよろしいでしょうか。

○ 米田委員：一言だけよろしいですか。グループ会議では、子ども食堂の扱いが生活困窮のところで良いのかという指摘もありました。そこから「子どもたちをみんなで見守る地域づくり」という文面が入っているという経緯があるのですが、このまま生活困窮というところに入れて、この「見守る地域づくり」という文章が入ると、やはりねじれていると正直思っています。そのため、具体的な修正の提案として、「子ども食堂等の取組を支援するだけでなく、子どもたちをみんなで見守る地域づくりに向けた取組「も」進めていく必要があります」というように、文章を変えていただく方が、まだ読みやすいと感じております。

将来的には子ども食堂の扱いを、この生活困窮に閉じずに、子ども・若者支援というところに、居場所づくり、社会関係資本を予防的なものとして位置づけるのがよいかなと思いますが、この段階では、この「子ども食堂等を利用する」の一文を削除し、取組「も」進めていく、という２ヶ所の修正を提案させていただけたらと思います。あとは検討いただいてお任せをしたいと思います。ありがとうございます。

○ 小野島部会長：ありがとうございます。後段の「子ども食堂等を利用する」という部分を削除し、それから、「取組を」ではなく、「取組も」進めていく必要があると、こういう修正のご提案でございましたけれど、Aグループの皆さんからご異議等ございますか。無ければ、そのような形で修正をお願いできたらと思いますが、よろしいでしょうか。

(Aグループ異議なし)

○ 小野島部会長：それでは引き続きご発言ございましたらお受けしたいと思います。ありがとうございます。伊達委員、よろしくお願いします。

○ 伊達委員：まず、政策部長にお伺いしたいのですが、この会議は何を目的とした会議で、こういったゴールを目指されているのか、「こういったものです」ということを定義していただけますか。今、ご発言いただいたようなことも非常に重要なことではあるのですが、この場で何を中心に、皆さんで議論したいのか。案内をいただいたときに、議題は「評価報告書について」だけしか書いておらず、私は何を話すのかというのが分からずにこの場にいます。まずこの会議の目的を明確にいただけますでしょうか。

○ 山下政策部長：ご案内がわかりづらく申し訳ありませんでした。まず委員の皆様方をグループ分けさせていただき、グループ会議でご議論いただきました。その結果を事務局としてまとめたものを、最終的に総合計画審議会にお諮りするために、もう一度横並びで見ていただく必要があります。それぞれ見ていない他のグループ会議の分も含め、部会の意見として、最終的に審議会に上げますので、皆様の総意として、評価報告書をまとめるというステップを踏むために、全体を通して、ご意見を改めて伺わせていただく場として、今回設定させていただいております。

○ 伊達委員：基本的には横串を刺して、もしくは自分が発言したところ以外のところに関して、しっかり

と目を通して意見を述べて欲しい、ということですね。加えて自分が発言したところ、グループ内で話したところで、反映されていないものがあれば、もしくは、より議論が必要なものがあれば、それも発言してもらいたい。プライオリティはどちらが高いのでしょうか。

- 山下政策部長：まずはグループ会議での「こういう考え方で作りました」という考えを、部会で共有いただいた上で、それ以外の部分も見ていただきたいのですが、どこに重点を置くというよりは、ご自身のグループの分も含めて、全体を見たときに、また違った視点で見られることもありますので、もう一度全体的に見ていただくというふうに考えております。

- 伊達委員：全体的な指摘をすると、EBPMのプロセスを十分に経ていないと感じます。国から医療現場における、もしくは医療における、自分たちがどのような問題意識を持ち、それに対してどのような仮説を立て、何を検証していくのかといったクリニカルクエッションの立て方、研究の仕方と、EBPMというのはほぼ同等であると思う中で、今回ここで評価や表現されているものについて、比較対象や結果のところ、いわゆる介入のところ、こういう介入をすれば、こういう結果が出るはずだろうとすべきところ、こういう結果とといったところでここを目指して、こういう介入がありますというように計画に記載されている。

この介入の件数というのは評価として必要なことなので、ここに関しては全然問題がありません。一方で、このような介入をすれば、こういった問題がこういった形で解決するはず、といった仮説検証というのが一切されていないことは、非常に問題があります。

資料1の最後のところに予算に関する資料が入っていますが、例えば駅のホームドアの設置といった場合、どれぐらいの予算かかったのか、実際に県が拠出している予算のうち、補助金で何か出しているのか、それぞれの項目に対してどの予算が使われたのか、などはまとめて記載されているのでわかりません。

加えて言うと、ホーム転落事故による人身事故では年間、全国で160人の方が亡くなっています。

安心安全といった意味では、やるべきことではありますが、10万人が利用する駅においては年間に何件発生しているのか、という基礎調査をせずに、それでホームドアを設置したら効果があるので、民間鉄道会社にこれをお願いする、ということは、ロジカルに考えたときに、非常に不健全です。エビデンスベースを考えたときに、これらの施策がどういう意味合いを持つのか、この予算がどういう意味合いを持つのか、さらに、倫理的、社会的に暮らしやすい、魅力のある神奈川として、どこに重点を置くべきなのか、こういったところがしっかりと有機的に繋がって表現され、毎年の活動が、その中でどう評価できるのかという非常に主観的なところも出てくると思います。単純に数字で、見えない部分が出てくると思いますが、この主観的考察といったものをどういう形で実施していくのか、場合によってはそのページが入ってきてもよいと思います。そう考えると逆にKPIは達成しなくても、施策が十分にできていれば、KPIは達成する必要はない。一方で、KPIが達成していても、この施策の部分が全然できていない。もしくは、この効果が単年度で出るものなのか、5年、10年かかるものなのか。もともと、アウトカムというものをどのような形で見ていくのかといったところの計画、もしくはその指標といったものが設計されていない中で、予算を投じるというのは非常に問題があるのではないのでしょうか。

やることはアクションとしては非常にポジティブではありますが、県の政策としてそれを進めていくといったときには、やはり少し足りない部分があるのではないかというふうに感じます。今ここでどのようにすべきかを示すことは限界があると思いますが、何かそのようなところを評価したり、考察したりするようなものを1枚、もしくは半ページでも入れていただいて、将来みんながそういう意識を持ち、EBPMにより精度高く取り組んでいけるような素地をつくっていくためにはこの報告書をどういうふうに変えればいいのかといったようなところを検討していただけると、努力が無駄にならないというふうに思います。

- 小野島部会長：かなり本質的なご発言であったと思います。グループCでも同じような形で議論になりましたし、果たしてKPIを達成したからといって、指標がどう動くのかというようにどこにどの程度関連性があるのかと言われると、相当の検証が必要だということは、かなり議論になりました。

特にコスト面のところは、かなり前からもう少し詳細なものが必要なのではないかというような議論は

あったかと思えますけれども、そうした意味でも改善の余地というのはいろいろあるだろうと部会長としても認識しております。

事務局としてはいかがでしょうか。

- 古河総合政策課長：伊達委員のご意見、ごもっともだと思います。県としても、予算を投入して、その結果をどのように見ていくかということだと思いますが、新かながわグランドデザインについては、以前から言われていることですが、ロジックモデルがまだまだ未熟な部分があります。例えば、グループ会議でもご議論いただいています、この目標値の置き方で、県のねらいにたどり着くものになっているのかどうか考えると、計画の作り方やその評価のあり方については、なかなか至っていない部分が多々あるのではないかと痛感しているところです。

一方で、KPIについては、なかなか費用や労力をかけないで設定してしまっているところもありますので、辛いところですが、県政の計画づくりや評価についてはこれからも続いていきますので、委員の意見を肝に銘じながら、これからも進めていきたいと考えています。

- 小野島部会長：ある意味、この評価報告書について、もう一度評価することが必要ではないかと思っておりますが、この計画は4年間続くので、この視点についてはきちんと継続して、改善の余地がないかしつかりと次の年度に伝えていくということが非常に必要であると考えています。事務局で、伊達委員がおっしゃっていた内容を次年度以降盛り込めないかというところを検討していただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

- 中田委員：伊達委員のご指摘はよくわかります。もう少し平たく言うと、一次評価、二次評価ともに「概ね順調に進んでいます」という評価がほとんどで、それはそれで一生懸命されているのでいいとは思いますが、最終ゴールがどこなのか、何を目指していて、概ね順調に進んでいるとしているのかがわかりません。「順調に進みました」で終わりにしてよいのか、それでプロジェクトをしっかりやったということになるのでしょうか。これだけいろいろな資料を作成していることも含めて、県庁の皆さんが一生懸命やっているとは思いますが、二次評価者として厳しいことを言わせていただくと、最終的に県民に届くのかと考えると、県民に対する真剣度が足りない、これでは県民に届かないと思います。

例えば、10の力を出して県民に届くのは2～3ぐらいだと思います。他の案件でもそうなので大変なのはわかっているのですが、神奈川県が本当に良くなったという県民の感覚が最終ゴールになるのではないかと思います。いくら施策をやっている人たちが、一生懸命頑張ったと言っても、受ける側の県民がそう感じていなければ、あまり意味がないと思います。一番難しいところですが、そういう視点をもっと持っていただけたらよいと思います。

それに関連して、先ほどのプロジェクト5のところでも少し違った意見を言いますと、KPIが順調に推移しているからよいのではないかという話もありますが、KPIは絶対的ではないと思います。グループCでも議論になりましたが、常に、このKPIでいいのか、KPIにプラスして、何か他の要素を取り入れたほうがいいのではないかなど、あと3年もあるので常に考えながらやってほしいと思います。

- 小野島部会長：中田委員がおっしゃっているように、継続して改善していくことがやはり重要だと思います。

- 古河総合政策課長：1つ目の県民に届けることについては、知事からも、この評価報告書に限らず、県のような様々な取組について、当事者の目線に立って進めるよう言われています。知事も4期目に入っているので、県民からどう見えているのかという意識は、県庁の中でも浸透しつつあります。それでも、県民一人ひとりに届けていくことはなかなか難しいと感じており、試行錯誤しながら、県の取組をPRすることも含めて、県民に届ける努力を続けているところです。評価報告書についても、県がどのような評価をしているのかということ自体を県民にしっかり見ていただけるように、努力していきたいと思っています。

それから、プロジェクト5のところで、KPIは絶対的ではないというお話もいただきました。プロジェクト5は、KPI自体は目標に対して順調ですが、都心回帰の動きについてはKPIからではなく、関連する統計データから分析しています。今後、プロジェクト5に限らず、KPI以外の関連する統計データ等もいろいろ調べながら、中田委員がおっしゃるように、まだ3年ありますので、しっかり評価できるよう考えていきたいと思います。

- 矢島委員：私も県民の目線に立つという部分で非常に課題があると思っています。グループ会議でも申し上げさせていただきましたが、もともと目標が非常に低いKPIに対して、達成率が90%だから順調だと言われても、県民の目線で見ると、それで納得いくのだろうかということを感じます。

それから、この報告書全体を通じて、二次評価において一次評価から1つも評価が下がっていないというのは、二次評価をやる意味があるのだろうかと思われても仕方ないのではないかと思います。県が事業を目標どおりに実施できているから、評価を下げるのはどうなのだろうかという意見もありましたが、それでは、そもそも二次評価で有識者が専門性や客観性を持って評価する意味がないのではないかと思います。また、1年目の今回がこういう二次評価だと、今後、一次評価に異論があっても、二次評価では下げないということが慣例的に続いてしまう懸念もあると思います。

もう1つ確認ですが、もしかしたら以前に説明があったかもしれませんが、KPIの達成率の計算方法がKPIによって違うのかお聞きしたい。実績の数値を目標の数値で割って100を掛けるのではないのでしょうか。

- 古河総合政策課長：評価報告書8ページの一冊下にKPIの計算方法についての記載があります。単年度の場合であれば普通に計算できますが、例えば、待機児童数など0を目標にしているようなKPIの場合や、数値設定が「累計」や「総数」の場合には、計算方法を変えています。目標に対して1年間でどのくらい頑張ったか正しく出すために計算方法を変えています。

- 矢島委員：101ページの「県のポータルサイトに登録している子ども食堂等の数」は、実績が366箇所、目標が264箇所ですが、どういう計算方法になっているのでしょうか。

- 総合政策課：「県のポータルサイトに登録している子ども食堂等の数」についてはカッコで総数と記載していますので、8ページの②のケースに該当します。2024年度の実績値から基準年度の実績値を差し引いた単年度ベースの数字を出した上で、2024年度の目標値から基準年度の実績値を差し引いた数値で割り返すこととなっており、実績値と目標値だけで割り返しても331.8%という数字にはなりませんので、このかたちで計算をしていただく必要があります。

- 矢島委員：具体的にどういった計算式になるのですか。見ていてぎょっとする数字がたくさん出てきており、計算方法は様々なのでしょうけれども、こうして表形式で一覧性をもって出したときに、その計算がよくわからない、数値がおかしいのではないかとと思われるのは大変問題だと思いますので、計算方法が様々なのであれば、一つひとつの表の下にその計算式を記載すべきだと思います。

- 総合政策課：101ページの子ども食堂等の数で申し上げますと、基準年度が2022年となっていますので、こちらの目標値264から実績数220を差し引きますと、44増やすことが単年度の目標であるところに対し、実績としましては、220から366に増えておりますので、差としましては146増えている形となっております。つきましては、先ほど申し上げた増加実績の146を単年度増加目標の44で割り返し、331.8%という達成率が算出されるかたちとなっております。

- 古河総合政策課長：矢島委員のおっしゃるとおり、この評価報告書が誰のためにあるかというと、我々のためではなく県民のためにあると思いますので、この計算式について、8ページの注釈には書いてあり

ますが、これを初めて見た人がわからないということでは県民の目線に立っていないことになります。ついては、今後見た人が素直に受け止められるよう、計算式を入れるなどしてわかりやすいものを心がけていきたいと思っております。

○ 矢島委員：やはりそこまで複雑に分ける必要が本当にあるのだろうかという思いがあって、105ページの「ひきこもり相談LINEの友だち登録者数」なども同様ですが、計算方法を指標によって複雑に変えているという点について、これまでの経緯があるとは思いますが、本当にそこまでして混乱する計算方法を取る必要があるのだろうかという点をもう一度確認いただければと思います。

○ 小野島部会長：数値をどのように計算しているかわからないということは非常に問題だと思いますし、先ほどの三百何十%というのはどういうことかと思われると思いますので、その辺をしっかりとわかるかたちで補足で説明をするということは非常に重要ではないかと思います。

○ 中西委員：これまでの議論でも「何のために評価をするのか」といった、根本的なところからの指摘があり、私自身も二次評価をしながら感じた中で、賛同する意見がいくつも出ていたと思っています。それに絡めて感想から入るのですけれども、部会長からも説明がありました、例えばプロジェクト8「脱炭素・環境」は「概ね順調に進んでいます」でよいのか、というところで特に感じたのですが、二次評価もですし、それから県による一次評価についても、何をもとにこの段階づけをしているのかというところが、ダメというわけではないですが、難しいと思っています。基本的には、県の一次評価はKPIの達成状況で段階を割り振っていて、それプラス、様々な状況を加味して多少調整しているということですよ。我々による二次評価のところでは、それがいいのかを検証すると言いながら、例えば今議論しているプロジェクト8の90ページは、とても到達できないような目標値が設定されている指標になっています。途中経過を見るとしても厳しい段階であり、本質的な達成したいものに対して、到達できそうか、到達できなさそうか、という観点がどうしても入ってきてしまい、これで「概ね順調に進んでいます」と評価していいのかという感想が出てしまう構図になっていたと思います。結局KPIだけを見るのか、総合的な状況をどこまで勘案するのかというところの兼ね合いが難しかった。これに対する答えはないとは思いますが、元々の本旨からすると、KPIだけに捉われるのも少し違うと思っています。KPIは本来しっかり捉われるものにはなりますが、実際にはそれだけではいけない。また、様々なKPIを見ていると既に目標を超えてしまっているものも散見されるので、どこかの段階でKPI自体、毎年でなくてもいいですが、途中でも、適宜見直すタイミングが入るとPDCAサイクルを回す意味合いにもなるかと思っています。

それからもう1つ違和感があったことを改めて思い出しました。7ページの凡例の右下、評価の区分とKPIの平均達成率の対応の表ですが、これががっちりと対応していてKPIでしか評価していないように見えます。目安の対応関係ということで私は理解していますが、二次評価をするときにも、これに従わないといけないのかなど、どのような位置付けでやっているのか悩ましかった。凡例を見ると、県による一次評価については、KPIの平均達成率で整理した上で、様々な統計データなどを活用して、総合的に評価するとなっていますが、評価の区分とKPIの平均達成率の対応の表は本当に一対一で、そのとおりにするよう表現しているようにも見えろと思ひました。それが二次評価にも影響を与えてしまうなど、読み取りにくかったので、目安であるとか、あるいは、「次のとおりに設定した上で、状況を勘案して県の一次評価にしています」などの説明を加える方が、より分かりやすいと思います。言いたかったことは、KPIや指標のどこを評価するのかということについて、答えというよりは、そのようなことを議論することがこの場だと思いますので、いろいろな意見を出し合うことが必要であるということをお願いしたかったということです。以上です。

○ 小野島部会長：改善事項もありましたが、事務局から何かありますか。

○ 古河総合政策課長：KPIの設定で、この4段階評価を設定してからスタートすること自体は、いろいろ

な議論があり、何も拠り所がない中でやるよりも目安となるものがあつたらいいのではないかという中で生まれたものです。KPIの目標値の設定も含めて、様々な問題がある中で、それがスタートラインで大丈夫なのかというご意見もあるかと思いますが、これが全てではなく、あくまで、総合評価のスタートラインでしかないということについては、注釈のところも含めて、記載方法の工夫をしたいと思います。

- 中西委員：私もスタートラインであることがいけないと言っているわけではありません。ただ、これではスタートラインだということが見えにくい、または、かなりこれに縛られているようにも見えるというところを懸念しているので、目安であるということがわかるような説明を書き込んでいただければと思います。
- 小野島部会長：あくまでも目安だということが分かるように文言を訂正することは事務局として可能でしょうか。
- 古河総合政策課長：注釈のところで、少し工夫をしたいと思います。
- 小野島部会長：よろしくお願いします。他に何かご意見はありますか。
- 原嶋委員：KPIに限界があるということは私も同感で、KPIの弱点を補うのは人間で、ここにいるメンバーだと思っています。少し確認をしますが、議論を聞いていると、プロジェクトの5と8と9については、よくよく確認すべきではないかと思います。この議論の結果が総合計画審議会に進むに当たり、プロジェクト5については、先ほど河野委員からご説明がありましたが、転出超過の数はやはり非常に多いです。プロジェクト8については、グループ会議で私からも来年辺りの様子を見ようと申し上げましたが、KPIの達成状況は良いものの、CO₂排出量の削減割合は、目標達成から見れば既にほぼ無理な状況となっています。プロジェクト9についてはデータの扱い、300%以上という達成率の扱いによって、KPIの96.7%も変わってきたりすると、県の一次評価も訂正しなければいけなくなるかもしれませんが、目の前の問題として、プロジェクト5、8、9については、部会として、本当にこの評価で審議会に上げるということでのいいのかということです。
いずれも、プロジェクト5は移住定住に関して、転出者が非常に多くなっているという点、プロジェクト8はCO₂削減の目標達成がミッションインポッシブルになっているという点、プロジェクト9はデータにいろいろと問題があり、評価結果が変わってくる可能性がある点、これらについて、最後に確認していただく必要があると思いますので、お願いします。
- 古河総合政策課長：プロジェクト9の子ども食堂等に関するKPIの達成率が300%以上となっていることについては、KPIの平均達成率の計算に当たって、100%以上の数値は100%としてカウントしますので、全体のKPIの数値にはそれほど大きな影響は出ないと考えています。今回は計算方法を記載する様な形で整理をさせていただき、次回以降、計算方法をどうするか、検討させていただきたいと思っています。
- 小野島部会長：そうしますと、原嶋委員のご指摘のうち、プロジェクト9については影響がないとのことですので、プロジェクト5、8について確認するということでよいでしょうか。
- 原嶋委員：該当プロジェクトを担当されたグループの委員がよろしければ結構です。
- 矢島委員：よろしいでしょうか。今年度については数値の見方を変えるのは難しいと思うので、おっしゃるとおりでよろしいと思います。ただ、KPIの達成率が300%や200%となる可能性があるものがあるのに、全体で90何%といった数字になると、皆さんはやはり100%が最大値と思って見るわけですので、300%や200%になる可能性のある計算方法が混ざっていること自体が問題ではないかと今のお話を聞いて

思いましたので、次年度以降に検討いただければと思います。

- 小野島部会長：それでは、プロジェクト5と8について、もう少しだけ時間をかけて議論いたしましょう。プロジェクト5に関して、河野委員、よろしいでしょうか。
- 河野委員：委員の皆様のご指摘はごもっともでございまして、「かながわの地域資源を生かした魅力的な地域づくり」が観光と地域活性化の両方にかかっていますが、この2つの言葉が、もしかしたら少し違う特性のものであるかも知れないという感じがいたします。
観光の数字は、オーバーツーリズムの問題についてどう捉えるのかということはございますが、かなり良いものが出ております。
委員の皆様がご指摘された、移住については、実はグループで議論したときは、KPIの平均達成率が訂正前の高めの数字であったという点はございましたが、観光の数字が全体的に高い数字になっているという点を評価いたしました。移住は確かに、地域全体の活力という点では問題があるかも知れませんが、観光としては人が来て達成できていることから悩ましく、ともすると、両者を一緒に扱うことの難しさもあるかと存じます。
その点も含め、私もグループBでは、「順調」として良いのではないかと判断いたしましたが、部会としてよいかどうかということについては、ぜひご議論いただければと思います。
- 小野島部会長：ではグループB以外の方で、何かこの件に関してご意見があればと思いますが、いかがでしょうか。
- 原嶋委員：私は参加していませんが、63ページの転入超過数がマイナスになっているところですよ。プロジェクト8「脱炭素・環境」で言えば、KPIはいろいろと達成しているけれど、CO₂の削減そのものは達成できないのではないかと、同じような状況が起きています。KPIは良いが、本来の目的や状況はどうなのか、ということがプロジェクト5と8に共通の現象となっており、どのように解釈するのか。CO₂については、中西委員のご指摘のとおり、今回はぎりぎりということでありましたが、CO₂の削減目標達成そのものは、ほぼ無理だということと同じようなことが起きているので、KPIとの兼ね合いについて、我々がどう判断するかということになります。
- 小野島部会長：その辺のところをもう少し文言で盛り込むことは可能でしょうか。ここのポイントに関して、二次評価で何か付け加えるなどの考えはありますでしょうか。
- 古河総合政策課長：そこも踏まえまして、55ページの二次評価では、「順調に進んでいます」としていただいた一方で、評価のポイントとしては、1行目から2行目に、都心回帰の傾向が強まっているという課題があるということを記載しています。
- 小野島部会長：ここで盛り込んでいるということでした。いずれにせよ、もう少し強調してもよいのかもしれないですけども、こういった課題がまだ改善はしていないというところは一応触れているということだと思いますが、これは次年度以降にきちんと引き継いでいくという形でよろしいでしょうか。
- 原嶋委員：例えば、合意いただけるかどうか分かりませんが、12ページの「総合計画審議会による総括」のところで、プロジェクト5と8については注視が必要だ、KPIの達成と全体のその状況の改善を踏まえて、次年度は特に注視が必要だということを、あえて強調するというのも一つの選択肢になるかと思います。
- 小野島部会長：わかりました。ご指摘はごもっともという気がいたしますので、もし記載するとしたら、

総括のページで、このポイントをしっかりと見ていく必要があるということを記載して次年度以降に引き継いでいくことは非常に重要だと思いますので、少し改善策というのを考えていただけたらと思うのですがいかがでしょうか。

- 古河総合政策課長：12ページの総括については、この後の議題としてご議論いただくので、そこでご指摘をいただければ、修文などの対応をさせていただきたいと思います。
- 小野島部会長：脱炭素のところは、もう何度も話が出てきておりますが、温室効果ガス排出量の削減割合50%を目標としているのに、現状としては19.9%になっていて、このペースだとどう考えても50%にはいかないのではないかというところをどう評価するのかということもグループCで議論になりました。ただ、ここでは、2022年度の実績までしか出ておらず、その先の2023年、2024年の実績が出ていないという中で、例えば、これで遅れているという形の評価をしてしまってよいのかというようなところが議論になったかと思います。やはり、もう少しこの指標の動向の19.9%がどうなるのかというところを見て、KPIが非常に良好なのに、指標が動かないということであれば、これはそもそもKPI自体がおかしいというか、そもそもやっていること自体が、それほど意味がなかったのではないかと、それこそコストに見合っていないのではないかとというような話になろうかと思いますので、これは継続してしっかり見ていく必要があるというような形で、グループCでの話が終わったと理解しております。そういう意味でも、プロジェクト5と8については、今後注視しなければいけないというような文言をどこかに入れる形で考えたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。
- 伊達委員：今、原嶋委員と矢島委員からご指摘があったところですが、これは単純に全部丸めてKPIと言ってしまって数字にしているから、いろいろなものが混在してしまっています。混在してしまっているものを1つの数字で評価するのは無理です。このKPIはこういう意味、こちらのKPIはこういう意味など、KPIそのものの質でもう少しグルーピングした方がよいと思います。KPIによっては、母数が書いていないのに件数だけ書いてあって100%ですとなっていますが、母数がいくつなのかわからない。対象人数が書いていないにも関わらず、何人が受講したからOKですみたいな、そういったKPIそのものの質が見えないものが多いと思います。そういった中で、なぜこのKPIを設定したのか、これは以前も議論させていただきましたが、こういう質のものが含まれていますということで「A」「B」「C」のようにカテゴライズして、そのカテゴライズされたそれぞれの達成率が「何%」といったような形で、数字にしても、今ご指摘等がありましたように、以前出した数字であるとか、そもそもこれには経済的に意味があるのかといったような、そのKPI自体に疑問が呈されているようなものも含まれているというのであれば、それも含めてしっかりと明示した上で、全部一括で示すというのが難しいのであれば、それぞれのグループごとに表現することでもう少しわかりやすい形にはなると思うので、この辺の数字のマジックのようところはもう少し県民に寄り添った形で、ごまかすという意図はないのはわかっているのですが、この数字にはこういう背景がありますよ」と示すことが逆に皆さんの苦勞をしっかりと伝えることにもなるかもしれないし、そういったところをもう少し建設的かつ構造的にとらえて、工夫していただければと思います。
- 小野島部会長：それでは事務局からお願いします。
- 古河総合政策課長：確かにいろいろなKPIが混在しているような状態で、それらの数字を足して割っているというような状態でありますので、確かにそのKPIの質というのをしっかりと見極めてグルーピングして、それで見せていくというのは、おっしゃるとおり県民目線に寄り添っていると思いますので、この実施計画の中では難しいかもしれませんが、今後の課題として生かしていきたいと思っています。
- 小野島部会長：他に何かございますか。小池委員、お願いします。

○ 小池委員：KPIの種類とそれから質というところと、あとはその達成をどこまでにするか目標の数値を決めていくときに、先ほどの数値を見ていると、目標値が全国平均等に比べるとかなり高くなっていたりするものもあります。ただ、全国平均を目指せばよいかというとそういうものでもなく、多分神奈川県で達成すべき数値というものがあるというふうに思いますので、他県の最も良い取組の状況等に関する数値をベンチマーク、指標としておいて、神奈川県ではこのように設定しましたというような、何か比較対象の基準となるようなものを設定しているものがあるのだとしたら、それを一緒にお示しするというのを加えてもよろしいのかなと思いました。先ほどのCO₂削減に関する平均値等を見ておきますと、全国平均で19%くらいが当たり前のような形であり、それでいうと神奈川県の50%という目標値がとても高い目標になっていて、「ちょっとそれはおかしいのではないか」とかそういう形で県民が考える「さすが」になるようなポイントを、例えばベンチマークのような形で示していただけると、よりわかりやすいのかなと思っておりました。以上です。

○ 小野島部会長：それでは、事務局からお願いします。

○ 古河総合政策課長：数字の持つ意味として、比較することで意味が見えてくるというものがありますので、ご意見はごもっともだなと思っています。全国平均と比べたり、他県の良い数字をベンチマークにしたりするという方法は確かにあると思っており、今後検討していきたいと思っています。全国平均などの他の数字と比較できないKPIもあるので、全部の目標値をそのようにするのは難しいかと思いますが、そういった「数字」というものの意味合いがしっかり見せられるような、そういった意識をしながら今後考えていきたいと思っています。

○ 小野島部会長：坪谷委員よろしく願いいたします。

○ 坪谷委員：ありがとうございます。KPIの質ということでは、私が属しておりますAグループで担当した、プロジェクト10「共生社会」のKPI、「多言語支援センターかながわ対応件数」ですが、こちらは最初に事務局から、現在件数のカウントをし直しているというご報告がありましたので、それはそれとしていいのですが、改めて報告書全体を見てみると、相談件数や相談数というのをKPIにしているものはかなりありました。

県の政策について、相談件数や対応件数等で成果を図るとしたときに、どこを取っていけばいいのかについて改めて考えましたが、相談件数が増加しているから良いと言えるのか、それとも政策の効果が出ていて相談件数が減ってきたから良いのかといったことがあります。また、神奈川県の外国籍人口が急速に増えているにもかかわらず、外国籍県民の何%が相談をしたのかではなく、なぜ「件数」や「人数」としてカウントする評価の仕方をするのか、ということがありました。

多言語支援センターにおける相談となると、1人の方がおそらく複合的・多層的な悩みを抱えて来られていると思います。そのような悩みを多言語支援センターは丁寧に聞き取りを行うなど、努力されていると思いますが、「1人」もしくは「1件」でカウントするのか。それとも様々な相談の種類を複数回答としてカウントすることによって外国籍住民の悩みの複合性・複雑性を捉えていくのか。

母子家庭就業等・自立支援センター事業による相談件数、配偶者暴力相談支援センターにおける相談件数など、相談件数のデータがかなり多く、この「件数」がもつ意味をどう捉えるか。また、ケアリーパー相談窓口利用者のように満足度で捉えているのもありました。県の政策としての相談窓口はとても重要だと思うので、全体として相談事業をどう捉えるか、（成果の把握方法を）統一するのか、プロジェクトごとにするのか、政策ごとにKPIを設定するのか等も、今一度考えていただけるとよいと思いました。

○ 小野島部会長：それでは事務局からお願いします。

- 古河総合政策課長：確かにKPIで相談件数または対応件数を置いているものが結構あり、その数字から見えるものは分野によっていろいろ異なる気がしています。

KPIの達成率で、その数字をどう読み解くかに関して言うと、その裏にあるものが見えない難しい問題があると思っています。そういったものも意識して、今後はKPIの妥当性も含めて、数値の設定など、全体のプロジェクトに沿って、意識が行き渡るように事務局として調整をしていきたいと思っています。

- 小野島部会長：続いて、評価報告書の12ページをご覧くださいと思います。こちらは、総合計画審議会の評価として、プロジェクト全体の総括をしております。こちらはグループ会議でいただいた総括的な意見などを盛り込んで事務局で作成した案になりますので、事務局から簡単にご説明をいただきたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。

《資料について事務局から説明》

- 小野島部会長：それでは、こちらに関してご意見をいただきたいと思います。先ほど原嶋委員からお話がありましたが、今回の評価部会では、プロジェクト5と8については何らかの記載が必要だろうということですので、12ページに記載するか、あるいは別のところに記載するという方向性で調整していただくと思っております。それを踏まえて何かご発言ございますでしょうか。

- 矢島委員：プロジェクト1についても同様の議論をグループAの中でしておりまして、その結果、15ページに、待機児童問題についてはこれまで継続して取り組んできたにも関わらず、いまだ解消に至っていないということで、数値だけの問題ではないということを入れていただきました。私としては、やはり同様の問題があるので、もしプロジェクト5と8に言及するのであれば、プロジェクト1についても言及していただけないかなと思います。待機児童問題は、もう30年間、待機児童ゼロを目標に掲げ続けていて、達成してないのです。それを今回もまただめでしたと言っている中で、概ね順調という言葉を使うことに強烈な違和感があるので、もし他のプロジェクトについて言及するのであれば、プロジェクト1も入れていただければと思います。

- 小野島部会長：総括の中でプロジェクト1を個別に入れるのかどうかも含めてですが、やはりプロジェクト5や8と同じ問題だと思いますので、総括ではこういった問題があるというような形で総括して、別のところで、プロジェクト1にはこういう問題がある、プロジェクトいくつにはこういう問題があると記載するのはいかがでしょうか。この総括のところは、あまり細かく書くというのもどうかなという感じがいたしますので。

- 矢島委員：そうですね。今のような視点で全部のプロジェクトをチェックしたわけではないので、もしかしたら、プロジェクトを個別に言及しないほうがいいのかもかもしれません。

- 小野島部会長：それでは、そういう方向性でという形でよろしいでしょうか。

(異議なし)

- 小野島部会長：それでは、そのような形で事務局で調整をしていただけたらと思います。そろそろ時間となりますので、まとめに入らせていただきたいと思います。皆様からいただいたご意見について、事務局と改めて調整させていただきまして、総合計画審議会でさらにご議論していただくように進めさせていただけたらと思います。今後事務局と調整の上、最終的な修正をさせていただくこととなりますが、いただいたご意見をできるだけ十分に反映させていただきたいと思っておりますので、その方向性でよろしいでしょうか。

(異議なし)

- 小野島部会長：ありがとうございます。それではそのようにさせていただきたいと思います。

それでは本日の議事については以上をもって終了という形にさせていただきたいと思います。本当に本日は、いろいろな意見が出ました。実際、私自身何となく思っていることも非常に多く出ておりまして、そもそもこのKPIの目標自体が適切なのかというふうに言われると、評価はよくわからないというような側面もございますし、実際問題、この評価は、一つを除いて、一次評価を踏襲しているという形になっていきますけれど、当然ながら二次評価をやっているわけですから、それが継続的にそういう方向性になってしまっただけでは困るということになりますので、やはり、どういう評価をしたのかということを次年度以降にきちんと引き継いでいき、そうする形で少しずつ改善、4年間ありますのでその中で改善していくというような方向性が極めて重要なのかなと思っております。いずれにしても多くの意見を頂きまして本当にありがとうございました。